

# 【成果概要】4-6 気候変動による琵琶湖の水環境への影響調査

## 調査結果の概要

### ■ 平成30年度の成果

- アオコの発生が問題となっている琵琶湖南湖を対象として調査を行った。
- 実地調査の結果、夏季にアオコ形成植物プランクトンである藍藻類が増殖し、アオコの発生や高濃度のカビ臭物質が検出される可能性が高まることを確認した(下表、右図)。
- 植物プランクトン動態の因果関係を解析するモデルを適用し、本調査の藍藻類データに対する利用での有効性を確認した。(実測値と予測値の相関係数は0.9程度)

表 琵琶湖南湖・瀬田川のカビ臭物質調査結果

調査日、項目	地点	(単位: ng/L)						
		長命寺沖	堅田沖中央	新杉江港沖	唐崎沖中央	際川	疎水取水口	瀬田川
2018年6月	ジェオスミン	<1	1	3	2	2	2	3
	2-MIB	<1	<1	<1	<1	<1	<1	<1
2018年8月	ジェオスミン	2	1	1	<1	<1	<1	1
	2-MIB	5	1	15	2	2	5	19
2018年11月	ジェオスミン	<1	1	3	1	1	1	2
	2-MIB	<1	<1	9	<1	<1	<1	<1

(実地調査結果をもとに日本気象協会が作成)

### ■ 明らかとなった課題

- 気象要素と植物プランクトンの短期的な関係性を示すモデルの有効性が確認された。今後、そのモデルをベースに長期予測を行うための調整を行う必要がある。

### ■ 平成31年度の調査計画(予定)

- 植物プランクトン・カビ臭物質の実地調査
- 気象等の要素と植物プランクトンの関係解析
- 植物プランクトン動態のモデル構築
- 気候シナリオによる影響評価、適応策の検討

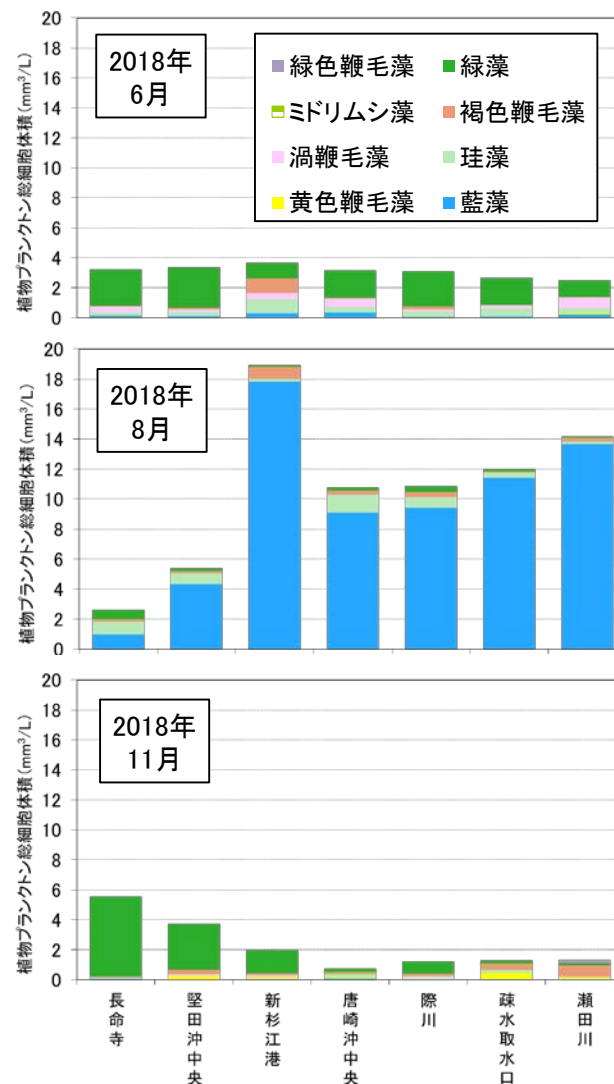


図 琵琶湖南湖・瀬田川の植物プランクトン調査結果 (実地調査結果をもとに滋賀県琵琶湖環境科学研究中心が作成)